武蔵野幕屋開設51周年記念集会

パウロの恵・信・行

――ロマ、ガラテヤ、エペソ、ピリピ、テサロニケ前――

１９９１年９月22日
小池辰雄

永遠的な現在　全召団は虹の姿　霊然的な人間　与えたもう神の義　聖霊の愛　われ生くされど我に非ず　ひとえに親鸞一人がため　天的必然が本当の自由　キリストの光で読む　一切の秘訣　破れかぶれで食いつく

【ロマ】

「21然るに今や律法の外に神の義は顕れたり、これ律法と預言者とに由りて証せられ、22イエス・キリストを信ずるに由りて凡て信ずる者に与えたもう神の義なり。……」（ロマ３・21～22）

「24功なくして、神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪（）によりて義とせらるるなり。」（ロマ３・24）

【ガラテヤ】

「20キリストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生くるなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がため己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。」（ガラテヤ2・20）

【エペソ】

「汝らは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト・イエス自らその隅の首石たり。」（エペソ2・20）

「凡ての者の神は一つなり。神は凡てのものの上に在し、凡てのものを貫き、凡てのものの内に在したもう。」（エペソ4・6）

【ピリピ】

「12我は卑賤におる道を知り、富におる道を知る。また飽くことにも、飢うることにも、富むことにも、乏しき事にも、一切の秘訣を得たり。13我を強くし給う者によりて、凡ての事をなし得るなり。」（ピリピ4・12、13）

【テサロニケ前】

「17絶えず祈れ、……19御霊を熄すな」（テサロニケ前5・17…19）

●永遠的な現在

［小池政美の話、「山路越えて」独唱、野尻での夢の話等割愛］

キリストの霊は、私たちに、あなた方一人びとりに、本当に権威のあることを語らせる。ですから、その点で、我々が受けている福音は本当に権威あるものである。決して、「であろう」の世界ではない。「であろう」ではなく、「である」である。ギリシャ語の未来形を日本語で「であろう」なんて訳したらダメなんです。時称は未来形であっても、断定してものを言わないと。だから、

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

と、キリストは常に現在化する。過去をも、未来をも、永遠の角度から現在化するのが本当の世界です。その現在も単なる相対的現在ではない。永遠的な現在です。永遠とは質的に滅びないものを永遠という。

私は虹が好きです。虹のことは漢語で「天弓」といいます。だから、この頃、号に「天弓」と書く。あの七色は本当は無限の色ですけれども。無色透明の太陽の光を受けて、無が無限の色に展開していく。素晴らしい真理を表している。そして、これが消えていく。けれども、虹はそんなに長くはいないんだけれども、涙の、天の雨の後に、美わしい喜びの虹がでる。本当の喜びを持つ人は、その奥には深い涙を持っています。そういう虹の姿が――ワーズワースの詩があるけれども――ワーズワースの詩以上の内容です。シラーが『クュンストラー』（芸術家たち）という詩の中の終りの方に、かなり素晴らしい句で書いてますけれども。

無即無限の世界です。空即是色の世界、色即是空の世界。「虹霓（こうげい）」という字があるですね、虹のことを。中国人というのはおもしろい。「虹」というのは雄の竜、「霓」というのは雌の竜なんです。虹が二通りにでる。内側の方が「虹」、外側の薄い方が「霓」。それで虹は二重に見える。これを「虹霓」という。これは竜なんだとさ。とにかく漢民族というのは想像が凄いね。中国では竜は霊獣ですからね。聖書では、竜はサタンの代名詞みたいだけれども。

西洋でも、ゲーテは超西洋なんです。あれはもぅ世界的です。大自然と彼は本当に和合している魂だ。神、大自然、それからその時その時に現れた女性、それが本当に彼の魂を段々上に上げていった。

「神―大自然―選ばれた女性―我」

というものが、ゲーテという人は融合していた。

ゲーテは決して浮気をしたのではないですよ。ダンテはベアトリーチェ一人だけれども。ゲーテは幾人もいるけれども、愛し方においては実は同じなんだ。それを分けて、藤井先生は、

「ゲーテはたくさんの女性がいたから気をつけろ」

と、私に仰った。無教会の先生方にはそこが分かっていない。何も先生をけなしているのではないけれども。

●全召団は虹の姿

そういうことで、私はとにかくもぅ、ちょっと説明できないことになりました。皆さんは、この破れ器を通してもの凄い福音が展開しているから、一緒にやってくださる。神さまは、私たちこの召団の人たちを通して――それぞれですよ、決して全体主義じゃない――あなた方一人びとり、各召団それぞれが、ちょうど虹のように光っていただきたい。何色でもいい。全召団は大交響楽であると同時に、虹の姿だと。そういう本当の天的な美しさでいきたいと思うんです。それだけの自覚を持ってくださいね。

どの国も、どの民族も全部、それぞれの使命があるんだよ。それを何だかんだと争って、人間というのは本当に利口のようで大バカなんだよ。救いようがないんだ、本当にキリストに来なければ。お釈迦さんではちょっとダメだな。お釈迦さんをダメとは言いはしないけれども。お釈迦さんの世界も、もぅ、キリストの世界は全部包摂してしまう。ケタが違うです、イエス・キリストというのは。ケタどころの騒ぎじゃない。それだけのキリストに、私たちはぶつかっているから、圧倒されながら生きているだけのはなしだ。「信仰」でも何でもない。「私の信仰は」と、そんなものは見やしない。キリストの言葉にすら躓くですよ。

「信仰うすき者よ」

なんて仰るから、

「私は厚くしなければいかんな」

なんて。厚くする必要はないんだ、何も。キリストは

「何もできない」

と言っているんだから、自分で。ちっとも、「善い」なんて言ってるのではない。ヨハネ伝によく書いてある。何者でもないから、それが、

「我を見し者は、父を見しなり」

でしょ。だから、

「我を見しものは、キリストを見しなり」

ということが、はらわたの底から言えるような証びとに、皆さん一人びとりがなって、それぞれの使命において、課せられた仕事を本当に花咲かせる。福音は決して色がつかない。それぞれの人らしく。

●霊然的な人間

では、これからパウロに入っていきましょう。今日の話は、「パウロの恵・信・行」という題です。

パウロの恵みとは何か。パウロが与えられた恵。もう大変な恵です、パウロの恵は。ということは、キリスト・イエスに逆らっていたパウロ、クリスチャンを迫害していたパウロ、それに恵が来た。「よし、よし」なんて、キリストは言わない。キリストは、ダマスコ途上

でパウロをひっくり返した。これがキリストの恵のすがたなんだね。ダマスコ途上でひっくり返されて――使徒行伝の9章、22章、26章にパウロが告白している――やっつけられた、キリストに。三日三晩、目が見えず、飲食ができず。アナニヤという霊的な人物に、ちゃんと示されている。

「お前はこういうのを尋ねて行って、按手してやれ」

と。とにかく、ああいうように、みんな不思議に、キリストから示されているんだよな。それで、按手されたら、聖霊を受けてしまったものだから、

「わが目より鱗（うろこ）の如きもの落ちたり」

と。今までの自分が大間違いをしていた。キリストに逆らっていたのが、180度転回して、彼は完全にキリストの僕になった、奴隷になった。マルチン・ルターが「奴隷意志論」と書いたのは、その姿なんです。キリストの奴隷に、キリストの言いなりになるのが本当の自由だということです。相手がキリストだからね。キリストは神さまの言いなりになって動いていた。これがキリストの自由なんだ。これがキリストにおいては、それは「神然」という。キリストは神然のひと、「神、然り」の人。私たちには神然は言えない。キリストの御霊によるところの、「霊然」の世界に入る。我々は本質的に霊然的な人間である。

私は説明していないですよ。私は自分の告白をしているんです。私が、相対的小池がどうであろうと、霊然なんです、正直。霊然でなければ、生きてられない。力が来ない。福音は説明しているうちはダメなんです。告白でなければ。ゲーテの文学も全部あれは告白です。私の詩も告白ですよ。アウグスティヌスの「ベケントニス」（告白録）という有名な本がある。

神然、霊然。それから、いわゆる大自然が自然。物理的な物の世界が自然。人間の本当の世界は道徳じゃないんだ。道徳を越えた霊然の世界。道徳だけではどうにもならん。モーセの律法ではどうにもならん。キリストが、モーセの世界をひっくり返してしまって、そして、ひっくり返してこれを本当に成就したのはキリストです。彼は言っているでしょ、

「17われ律法また預言者を毀（こぼ）つために来（きた）れりと思うな。毀たんとて来らず、反（かえ）って成就（じょうじゅ）せん為なり。18……律法の一点一画も廃（すた）ることなく、ことごとく全（まった）うせらるべし」（マタイ5・17～18）

と。「一点一画も」という表現は、何も律法をそのまま文字の上で肯定しているということではないですよ。キリストやパウロの、旧約の引用の仕方なんかは勝手なものだから。

それから、神然。これはキリストだけが神然。神然なるものはイエス・キリストだけ。どんなに振興宗教ができようが、何派があろうが、イエス・キリストはいわゆる超派であり、とにかく「超」なんだ。

パウロはそれを本当に受けとっているね。パウロがなかったら、この新約聖書はない。そのパウロも何も新約聖書を書こうと思っているのではない。本当にキリストでもって動い

ていたね、この人は。大変な人だ。「パウロ研究」なんて言ったってね、聖霊を受けなければ、十字架を本当に受け聖霊を受けなければ、パウロ研究なんてできっこないです、いわゆる「研究」、いわゆる「神学」では。たくさんありますよ、パウロ神学を書いた本が。ただ一点を欠く。画竜点睛だ。

聖霊の内容というものは、説明できないんだ。体験するまでは、圧倒されるまでは。皆さんも、生涯でもって、若い人は

「いやぁ、これは参った、本当だ、こういう世界だ」

ということが言えるようにならなくては。

●与えたもう神の義

まず最初に言いたいのは「義」です。そのことはロマ書3章21節から31節に一番よく書いてある。とにかく、ロマ書というのは――もし新約聖書の中から或る一つの章を選べといったら、ロマ書8章――全部を含んでいると言ってもいいくらいです。

「21**然るに今や律法の外に神の義は顕れたり、これ律法と預言者とに由りて証せられ、22イエス・キリストを信ずるに由りて凡て信ずる者に与えたもう神の義なり。**……」（ロマ3・21～22）

と。モーセの律法の他に神の義が現れた。

「与えたもう神の義なり」

ということに気をつけてください。よく「義とする」と書いてあるね。パウロもそういう言い方もしている。ここでは、特に「与える義」と書いてある。義が与えられるんです、私たちに。義の実体は何かというと、キリストなんです。キリストは義の実体です。

「キリストが義の実体」

ということは、神さまの聖意を完全に行うことが、義なんです。聖意体現することが義です。何か「正義」ではないよ、この「義」というのは。旧約の概念とは違うんだ、このパウロが言っているのは。ところが、旧約的な意味で義に躓いて、

「私はどうにもならん」

とマルチン・ルターが苦しんだ。

義というのは、普通、堅苦しく思うんだよな。だから、義の概念も、皆さんはもう、取り直していただかなくては。「義」とは、「聖意体現」を義という。聖意体現をできないんだ、我々は。それが「罪びと」というんだ。神さまの意志を身体でもって現ずることができない。

「与えたもう義」、キリストの義を与えられた。「キリストという義」なんだ。これでもうはっきりした。キリストという義は、キリストという愛であり、キリストという生命であり、キリストという光である。もうしょうがないよ、キリストは。あらゆる概念をキリストは中に有（も）っているから。けれども、神さまの意志を体現するという意味において、義なんだ。

そのためには、自分の意志を棄てた。

これができないんだ、我々には。「自由意志」なんて言ってね、みんな、持ち前のものをもってやることを「自由意志」という。ペラギウスとアウグスティヌスとの戦い。エラスムスとルターの戦いが、この「自由意志論」なんだ。エラスムスは自由意志、それは哲学的、道徳的な世界は自由意志ですよ。けれども、もう一つ次元の違った、本当に宗教の世界は、これは奴隷意志にならなければ、本当の宗教の世界の、神の意志は体現できないですね。体現するためには、聖霊が来なければダメなんだ。聖霊の力が来ないと。十字架が私たちの自由意志を殺したんだ。そうすると、聖霊がやって来る。十字架は本当にそうなんだ。十字架と聖霊です。

「24 **功**(いさお)**なくして、神の恩恵**(めぐみ)**により、キリスト・イエスにある贖罪**(あがない)**によりて義とせらるるなり。」（ロマ3・24）**

「功なくして、神の恩恵により」

という。パウロの恵みは、ひっくり返された事が恵みなんです。ダマスコ途上でひっくり返されたのが大恩恵なんです。キリストは、敵をもゆるすばっかりでなくて、敵をも救い上げてしまう。

「負債(おいめ)ある者を赦(ゆる)すが如く、我を赦し給え」

でなくて、キリストは負債ある者を救ってしまった。我々も本当は、敵も味方もありはしない、全部救い上げるだけの力を聖霊は持っている。

●聖霊の愛

もう、いわゆる普通の神学や、いわゆる普通の信仰概念を本当に越えて、パウロを本当に受けとってくださいよ。パウロ書簡は、その角度から読むと、もの凄い有機体的な構造のものだということがわかる。驚くべき人ですから。パウロの中には、もの凄い線の太いものとまた細いものと、何でもある。私は、今日を迎えるために、パウロの書簡を全部読んだ。とても楽しかった。参考書なんか一つも読まない。

パウロはコリント前書13章で、愛のことを語っている。あそこで、

「愛は……、愛は……」

と言って、一生懸命書いている。

「山を移すほどの信仰があっても、愛がなければダメだ」

と。信仰のチャンピオンであるパウロが、「愛、愛」と言っている。この愛は聖霊の愛、キリストという愛です。これも単なる概念じゃないです、この愛というのは。

「そういう愛はなかなか持てない」

なんて言ったって、ダメだよ。愛の元であるキリストを持てば、パウロが言っているコリント前書13章はそのまま、

「ああ、そうです、その通りです」
と言えるんです。
「愛は妬まず……」
とある。
「本当に私は妬まないだろうか？」
なんて、そんな事を一々考える必要は何もない。もうとにかく、一つの焦点が燃えると、後は全部スーッと溶けてしまう。こんな素晴らしい福音をいい加減にしているのは、もったいないはなしだよな。
牧師さんたちは、聖書を一生懸命で参考書や何かで研究してものを言っている。聖書について語っている。ダメだよ、それでは。聖書という現実の中からものを言うようにならなければダメなんだ。説明の世界ではダメだ。解説ではないんだ。告白なんだ、全部。だから、パウロの難しいような言葉が、その角度になったら、グーッと力となって響いてくる。ひとの書いたものをけなすわけじゃないけれども、それはもう卒業してしまっている。卒業したって、私は学ぶものは学びますよ。全部、主体的に学ぶことができるんです、何を読んでも。とらわれない。

●われ生くされど我に非ず

それから、復活のことが出ている。コリント前書15章。彼は、
「キリストがもし甦（よみがえ）らなかったら、我々の信仰は空しい」
と散々言っている。「復活」と言ったって、息を吹き返したのではない。もともと持っていたキリストの霊生が、はっきり具体的に現れたということです。肉体でなくて、霊体をもって。霊体の世界は事実だから。戸を閉じていたって、入って来るんだ。原子核よりか凄いんだ、この霊核というのは。まぁ大変な世界だね、このキリストの現実というのは。
私は正直、全部その通り受けとっていますから。普通の神学者は
「そんな事があるか、これは宗教物語だ」
なんて言って、半分笑っているんだよな。物語だと思う人は物語と思ってください。結局その人はその人の次元にしか行けなくなってしまう。
カリスマ的なものが現れようが、現れまいが、カリスマの奥の世界、本当のカリスの世界、この本当の恵の強力な世界が私たちの中に内住するんです、現象の奥の世界、根源の現実が。キリストの根源現実を中に持たなかったら、つまらないですよ。
「私は一向に霊的な現象が起きません」
と、起きなくたって構わない、そんなことは。ひとによっていろいろなんだから。
ガラテヤ書2章20節というのは非常に大事な言葉です。
「[20]キリストと偕（とも）に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリス

ト我が内にありて生くるなり。」（ガラテヤ2・20）

「我キリストと偕に十字架せられたり」

と。キリストの十字架をただ信ずるんではなくて、

「自分はキリストと一緒に十字架されてしまった。キリストと一緒に私は葬られました」

と。キリストを受けとってね。本当は、

「われ生く、されど我に非ず」

と書いてある。

「最早われ生くるにあらず。われ生く、されど我に非ず。キリストわが内にありて生き給うなり」

と。

「今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がため己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。」（ガラテヤ2・20）

「神の子を受けとるによって、信受することによって生きているのだ」

と。ここで、いいですか。私が今あなた方に何を言おうとするかというと、これ、みんな

「われ、われ」

と書いてある。「我ら」とは書かない。単数なんです。この「一」の「単数」の世界でなければ、信仰は本ものにならない。よく、教会は、

「教会に行って、教会員になると救われる」

なんてやっている。冗談じゃないよ、教会員になろうがなるまいが、幕屋の人に召団の人になろうがなるまいが。それが単数です。

「神―キリスト―我」

の、直線の単数の関係が本ものになるまでは、信仰は本ものにならない。

「十字架せられたり。最早われ生くるにあらず、キリストわが内に在りて生くる」

キリストが私の中に在って生き給う。これが「エン・クリスト」（キリストの中に）の世界、聖霊の世界。聖霊のキリストが、キリストの聖霊が私の中で生きていらっしゃる。だから、十字架と聖霊はこの一句の中にちゃんと入っている。復活の生命も入っている。大変な一節です、これは。これが身に付くまでは本ものになれない。うそとは言わないけれども。

●ひとえに親鸞一人がため

親鸞があの『歎異鈔』の終りの方で、

「（結文）聖人のつねの仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。」

という、この句が大変大事な句なんです。長いこと考えていることを「五劫思惟」という。法蔵菩薩として修行している間を、「五劫」というんだそうだ。弥陀が一生懸命で考えてくれた、その内容は全部これは、

「ひとえに私親鸞のためであった」

と。

「キリストの福音は私一人のためだった」

ということが本当に告白できたら、どん底の告白ができたら、これはパウロと同じことになる。パウロが単数でものを言っているのは――ガラテヤ書2章20節で、「私たちは」ではない、

「私は十字架せられた、私は生きていない、私の中にキリストが生きている。キリストの福音はひとえにパウロのみにあった、私のためであった」

ということ。あなた方一人びとりが、

「キリストの福音は私のためだった」

と告白する。ルターがその角度になった。それが宗教改革の基になった。律法の義が、どうしても、ルターは義に躓いていたのは、

「この義が福音の中に現れた」

ということはどういうことか、ということに気が付いた。ロマ書の1章の17節だ。それでもって彼はひっくり返った。だから、一人びとりが真剣勝負なんです。

「神―キリスト―我」

ということ。そこに十字架・聖霊が本当に一つになる。それを体験するまでは、

「ひとがこう言った、先生がこう言った」

ではない。

「こう書いてあった。こう聴いた」

ではない。

「私は受けとりました」

と、これを告白するまでは、本当のクリスチャンではない。だから、キェルケゴールが、

「本当のクリスチャンは天才よりか少ない」

と言ったのは、その角度の言葉です。うそとは言わないよ。段階の、まだ前段階なんだよな。本段階に来なければ。私は阿蘇でもってひっくり返ってから、あそこから本段階になった。無教会時代はダメなんだ。「何か足りないな」と思っていた。聖霊のことを既にもう指さしてはいたんだけれどもね。手島君がその一つのきっかけにしてくれた。

だから、私はこれだけの――「これだけ」と言ったって、質的だよ、量的ではない――キリストの無限無量なものが質的にやって来たら、これは簡単に死ぬわけにいかない、正直。私は詩のかたちで告白する。ある人は作曲で告白するでしょう。何でもいいよ。皆さんそ

れぞれです。しかし、最大の告白は生涯そのもの。誰でもができるのが、生涯そのものの告白。生きること自身が告白である。これは万人可能の一番大事なことです。その点がもしなかったら、何を告白したってダメなんだ。それは本ものでない。

だから、パウロのこのガラテヤ書2章20節も親鸞の、

「ひとえに我がためなりけり」

と。私はキリストと一緒に十字架せられてしまって、自分の中にキリストは生きている。

「我々の中に」

とは言ってやしないんだ、彼は。

●天的必然が本当の自由

だからパウロは、

「この世界に生きましょう」

と言って、一生懸命で伝道せざるを得なかった。

「われ福音を宣べ伝えざれば禍害（わざわい）なるかな、やむを得ざるなり」

と彼は言っている。「やむを得ざるなり」のギリシャ語は「アナンケー」というんですけれども。止（や）むを得ない、止むにやまれずしてやっている。これが本当の世界だと。

"nor than can I do"

"Ich kann nicht anderes"

ということ。マルチン・ルターがあのヴォルムスの会議でもって叫んだのがそれなんです。

「別なぐあいにはできない。かく在らざるを得ない」

と。これが本当の自由なんです、この在らざるを得ない世界が。選択でないから。

「こうしようか、ああしようか」

ではない。必然なんだ。天的必然ということ。天的必然で動かなければ。天的必然が本当の自由である。何をするにしても、この世界を内側に持たなければ、もの凄い展開はしませんよ。だから、

「本当の福音の世界は一切の文化文明を正しく豊かに展開する原動力である」

とはっきり言います。どんなに立派そうに見えたって、これはダメなんだよ、根っこがなければ。根っこの世界だから。

漱石が「根っこ」ということを言ったけれども、漱石さんもちょっと根っこがまだ足りなかった。漱石の文学は素晴らしいよな、藤村でも。だけれども、まだ足りない。最後の世界が足りない。だから、ドストエフスキーだとか、ユゴーだとか、ゲーテだとか、この彼等の次元にかなわないんだよ。なぜ彼等は素晴らしいかと。それはホーマーの「イリアド・オデュッセイ」は素晴らしいけれども、ホーマーにしたってまだ足りない。プラトンの「対話篇」の方が凄いよな。藤井先生もいいところをねらっておられたけれども、おしかったね。

先生の詩も途中でダメになってしまった。先生もまた、いわゆる義にちょっと強すぎて、やっぱり聖霊の世界が欠けているからね。

エペソ書の2章20節、

「汝らは使徒と預言者との基（もとい）の上に建てられたる者にして、キリスト・イエス自らその隅（すみ）の首石（おやいし）たり。」（エペソ2・20）

「使徒と預言者との土台の上にあなた方は建てられているが、キリスト・イエスはその隅の首石だ」

という面白い言葉がある。

「一切のものは、キリストでもって帰一してしまう」

というのがエペソ書1章9節、10節に書いてある。

●キリストの光で読む

「使徒と預言者」とよく私は言います。旧約聖書では、預言者は特にイザヤ書です。大変だ、このイザヤ書というのは、66章。これは旧約聖書の最深最高のところ。もう、全聖書の内容が全部イザヤ書の中にある。一生かかってイザヤ書を研究したって、間違いじゃない。イザヤ書を研究しようと思ったら、全聖書を読まなくてはならない。とにかく、聖書には食いついてくださいよ。キリストの光で読んでください。律法ではない。読まざるを得ない。

本を読むにも、本当に眼光紙背に徹すると、始めと中と終りを読めば分かってしまう。これは自由の世界だからね、すべて律法ではないから。一日一冊いろいろな本を読むのも結構だが、ダンテとかゲーテとかいう大作を繰り返し読むことが、また大事なこと。いわんや聖書においてをや。皆さんは、自分の在り方、自分のやり方ということを本当に示されるよ。福音の中にいると、何でも見えてくるんですよね。不思議なものでね。

特に預言書と使徒行伝と使徒の手紙。しかし、何といっても、福音書なんです、その中心は。「隅の首石」というのは福音書のことです。福音書が隅の首石。キリストの全存在が現れているところだからね。まぁ大変なものだよ、この福音書は。一字も無駄がないね、この福音書というのは。御霊よって書かれた本というのは大変なものだね。キリストはどんな形をしてたとか、鬚がどうだとか、そんなことは書いてない。

それから、エペソ書の4章1～6節、

「凡（すべ）ての者の神は一つなり。神は凡てのものの上に在（いま）し、凡てのものの内に在したもう。」（エペソ4・6）

「神さまの霊は、キリストは、一切のものに超在し、遍在し、貫在し、内在する」という。だから、万象はこのキリストに在って帰一してしまう。キリストは遍在している。

「キリストはいろいろのもの」

というような勝手な言い方までしています。凄いことを言っているんだから。パウロはそ

のように、キリストをもの凄い幅の広い、もの凄いものに見ている。

「その愛の広さ高さ深さのいかばかりなるかを」

と、感嘆しているところもある。感嘆しているんだ、パウロは。パウロほどキリストに感嘆、圧倒されている人間はいないんだ。だから、百難を突破した。コリント後書11章でもってさんざん言っている。こんな患難にあえば、普通なら皆仆れてしまう。ところが、彼は仆れない。聖霊の力がきているから。何よりの証拠なんだ。もぅ、キリストは大変なひとだし、パウロは大変なやつだ。「大変」という言葉しかないんだ、私は。何かいい言葉があるかな。

●一切の秘訣

ピリピ書の4章12、13節で、

「12我は卑賤（いやしき）における道を知り、富における道を知る。また飽くことにも、飢うることにも、富むことにも、乏しき事にも、一切の秘訣を得たり。13我を強くし給う者によりて、凡ての事をなし得るなり。」（ピリピ4・12～13）

「われ一切の秘訣を得たり」

と。彼が正にそうなんです。「一切の秘訣」です。パウロの、キリストの驚くべき恵み、ひっくり返された恵み。それから、彼の信は、本当にキリストを「エン・クリスト」でもって受けとるのが、彼の信である。彼の行は、この驚くべき使徒行伝の伝道そのもの。これが彼の「恵・信・行」である。そういうこと。

そしてパウロは、

「キリストは私たちの首（かしら）で、私たちはその体（からだ）だ」

という言い方をしているのが、コリント前書12章のところ。我々はキリストの体だと。だから、体受しなければダメなんだ。彼の歴史的哲学はそのロマ書の9章以下に出ている。ユダヤ人は躓いている。だから、救いは異邦人に、世界に来てしまった。

「最後にユダヤ人が悔い改める時が来れば、その時はおしまいだ」

と。その通りでしょうね。相変わらず旧約に留まっているんだから、ユダヤ教は。マホメット教なんてのは派生したとんでもないものだ。ダンテが地獄に入れてしまったけれども。剣を持ってやっているのは、キリスト教も剣を持っているうちはダメだよな。

「剣（つるぎ）を鋤（すき）に変え、鍬（くわ）に変えろ」

と、ちゃんとイザヤは既に言っているんだ。

まずしょうがないね、これ。男はすぐ喧嘩したいんだね、戦争を。必ずどこかでやっている。個人的には殺人犯があるし。女の方は非常に使命があるんだ。女の方は、子供があろうがなかろうが、第二の国民の魂を本当に育てるのは、女性の仕事なんだ。偉大な人のお母さんはみんな魂がいい。例外がないですね、ほとんど。女子学校の校長さんは、そのことが分かっていなければ本当は教育できないんだ。

言葉の深い意味で、本当の理性、これは無ければダメなんだ、日本人は。その本当の理性をもう一つ上の霊性がちゃんとオリエンティーレンする。ちゃんと位置づけてやる。福音の構造は素晴らしい、これは何とも言えないんだ。

●破れかぶれで食いつく

最後に希望のことが言われている。希望のことは、パウロは余り言わないけれども、しかし、テサロニケ書には出ている。終末的なところ。テサロニケ前書4章13節から18節。

「17**絶えず祈れ、**……19**御霊を熄(け)すな**」（**テサロニケ前5・17…19**）

と言っている。「祈れ」というけれども、祈らざるを得ない。祈らなければ力が来ない。「祈る」というのはキリストの中に入ることだから。

「主さま！」

と一言いえば、キリストの中に入っちゃう。「主さま」と言って、キリストの中へ自分を投げ入れてますか。私みたいに、みんなバカにならなければダメですよ、利口すぎては。

聖霊以前には、そういうことができなかったね、私は。何か欠けていた。みんな立派な祈りをしますよ、祈りを聴いていると。立派じゃダメなんだ、祈りは。破れかぶれで食いついてなければ。

何がどうなったって、大丈夫だよ、皆さん。相対的な現実がおかしくなればなるほど、問題があればあるほど、逆に力が来る。絶対にへこたれない。私みたいな生まれつきの弱虫が、こういうことを言えるようになったのが不思議でしょうがない。天界の兄貴はびっくりしているね。天界の兄さんも、私に驚き喜んでくれていると思います。何よりも、私はまた別な意味で、母には本当に頭が下がります。苦難の連続だったね、母の生涯は。

コリント後書6章8節から10節。無一物無尽蔵の世界が書いてある。12章には「第三の天」「大(おお)なる広大なる黙示」。とにかくパウロというひとは智慧の上でも、カリスマ的な面でも、何でもかんでも、あらゆるものをいただいている。凄い野郎だね、このパウロというのは。まず、キリストの他には、パウロみたいなやつはいないね。キリスト教の歴史でも、仏教だって、このパウロにかなう奴はいないでしょう。大変なやつだよ、これは。また、ヨハネはヨハネで別な味がありますからね。あまり「十字架」なんて言わないんだ、ヨハネは。だけれども、ヨハネを読もうが、パウロを読もうが、ペテロを読もうが、ヤコブを読もうが、我々はみんなキリストの光で見るんです。絶対に躓かない。それぞれの善さを。だから、天地万物、東西古今を本当に融合するところの驚くべき世界、最後の新天新地を既に地上において、その前味をいただいている世界。しょうがないんだよ、本当のクリスチャンというのは。インチキなものは蹴飛ばす。正直な罪はいいです。だけれども、ゴマかしだの、インチキだの、策略という世界は、これはダメ。「パウロの恵・信・行」というのは、大体、そういうすじあいです。おわります。